

# 唐山大地震における追悼と記念

王 曉 葵

## はじめに

戦争、自然災害などによる大規模な死者が発生する場合、通常「事件」として認識され、処理される。そして、死者の埋葬、葬式、祭祀及び記念行事などは個人の次元を超え、「公」的性格を持つことになる。その場合、国家権力、地域社会が直接にその「死」の処理に関わることはごく自然であり、むしろ一つの責務として果たさなければならない。その責務は、大量死者の同時発生が社会へ与える恐怖、秩序の混乱などを最小限に抑え、社会の安定を回復させることにある。それと同時にその死の意義を「説明」することにもある。災害の報道、記録、死者の追悼、記念物の建造などの行為は、ほかならぬその「説明」の一環である。その「説明」を行う際には、さまざまな政治的・宗教的・文化的な価値判断がそこにつねに伴っている。従って、この「説明」の過程を解明することは、この社会特質を理解するための重要な手懸りとなる。

本論は1976年7月28日に発生した唐山大地震を対象にして、その報道、記録及び記念の特質を解明したい。またそれを通して1976年から2006年まで30年間の中国社会の変化を探りたい。

## 一. 災害の発生及び報道

### 1. 震災の発生

1976年7月28日3時42分54秒、中国河北省唐山・豊南あたり（東経118.0度、北緯39.4度）に、マグニチュード7.8の直下型地震が発生した。被害範囲は約21万平方メートル、その中で唐山市中心から周辺3万平方メートルの地域の被害は最も激しく、市内の90%の建物が崩壊し、道路、橋、鉄道、水利施設などはほぼ全壊となり、市全体が廃墟と化した。正式な統計によると、死亡人口は24.2万人、重傷者は16.4万人、軽傷者は詳細

の数字はないが、重軽傷者合わせて76万人あまりにのぼるといわれる。従って、地震による直接の死傷者は100万人に達している。

## 2. 死体の処理

地震後、行政機能は一時麻痺状態に陥ったため、市民は自ら埋葬地を探すこととなった。場所は唐山郊外の荒地で、埋葬地を奪い合ったため喧嘩することもあった。墓穴を掘り終わり、死体を運んでいく間、その墓穴が他の人に横取られることもある<sup>1)</sup>。当時の状況について、ある体験者は次のように書かれた証言をした。

体力があるものはすべて埋葬に加わっている。生存者が多い家庭には体面を保つ余裕があり、遺体を新しい綿入れの布団で包み、二人で担ぐか、人力車で郊外に運び埋葬する。生存者が少ない家では、崩れた家屋の廢墟に埋葬することが多く、家族全員が死亡した家は、近所の人によって遺体を掘り出し埋葬する人がいたが、大部分はそのままで廢墟の中で埋められてしまった。<sup>2)</sup>

地震後、救援体制が次第に整い、行政機能が回復することによって、死体の埋葬作業は組織的に行われるようになった。その重点は廢墟に埋められたままの死体である。『唐山市誌』によると、こうした死体は死体を扱う専門チームによって整理され、集中的に埋葬された。河北省政府は埋葬地及び墓穴の深さは「市内から5キロ以外、深さは1.4メートル以上」と決めた。

具体的には、1976年11月21日、死体の整理作業がはじまり、性別を弁別できるものは、男女を分けて集中的に埋葬した。家族が自分で埋葬するのを希望すれば、決められた時間、場所で埋葬することができた。死体はすべて特製の大きいプラスチック袋で包み、まず、水源地及び住宅街に100メートル以内の死体を全部運び出す、そして当初市区部に近い交通要路付近で埋葬された死体を石灰で消毒し、1メートルほどの土を被せ、ローラで二度固める。最後に、当初そのまま廢墟の下に埋められた死体をすべて掘り出す。作業は遺族の気持ちを配慮して、すべて深夜に行った。12月26日、作業はほぼ終了し、合わせて52410の死体が掘り出され、それぞれ郊外果園公社王家墳、栗園公社朱家墳、老半壁店場陷坑、梁屯公社石莊

場陥坑、白馬山採石坑、無水荘採石坑、古治人民公墓、北范各荘採石坑などの8箇所<sup>3)</sup>の公墓で埋葬された<sup>3)</sup>。

このように性別に分けて埋葬すること、また数度の移転によって、死者の身元確認は不可能となり、遺族は亡くなった家族の遺骨がどこで埋められたかさえ分からない。したがって、伝統的な風習に従ってお墓や墓碑の前で葬式や祭祀をすることは不可能となった。これは後述するように、交差点で「焼紙」という方式で追悼することの起こりの直接的な原因となる。

勿論、家族によって埋葬されて、墓地がある死者もある。この場合は毎年7月28日、或いは清明節（陰暦4月5日）お墓で「焼紙」で死者を記念することもある。また少数ではあるが病院で亡くなった被災者の遺骨は病院で保存されている。軍人記者銭鋼は彼の『唐山大地震』の中で、彼が訪問した陸軍255医院には小さな霊堂が設けられ、なかには一部の死者の遺骨が納められていることを紹介した。霊堂には遺族がさまざまな形で哀悼の意を表している。

ある幼い女の子の骨箱の上には、包装紙を剥かれたチョコレートが置かれていた。チョコはすでに溶けていた。生前思う存分食べられなかった大好物なのだろうか。もうすべてとりもどすことはできない！<sup>4)</sup>

霊堂には特製の大骨箱があり、それは大きいのが一つ、小さいのが三つ、合わせて四つの骨箱で組み合わせられ、この特殊な図案はある父の手によるもので、失った妻と3人の子供のことを悼んでいる。<sup>5)</sup>

このような形がある「物」に託して、自分なりの方式で哀悼の意を表することができるのは僅かの遺族で、大多数の遺族は、ある「擬製」の追悼空間で死者を追悼するしかなかった。

### 3. 震災に関する報道

唐山大地震が発生する1976年は中国政治の地震期とも言える。その年に毛沢東、周恩来、朱徳など中華人民共和国建国の指導者たちは相次いで世を去り、また四人組体制の崩壊などで、この年は中国歴史上忘れられない一頁となった。当時、大物政治家の死による政局の変動などの国の運命に関わることと比べて、この地震はそれほど注目されていなかった。また

地震に関する報道も政治的な色彩に染められた。地震の翌日、『人民日報』は「河北省唐山、豊南あたりで強烈な地震が発生、被災地域の人民は、毛沢東主席の革命路線に従い革命的精神を発揮して災害に立ち向かっている」という題名の報道を掲載したが、地震の震度、被害の詳しい様子などについての紹介は「震源に近い地域は一定程度の被害があった」にとどまった。3年後の1979年11月17日、中国地震会議が開かれ、その場でこの地震の死者数は24万人あまりと公表された。会議閉幕の翌日、即ち11月23日の『人民日報』が会議のニュースを掲載した。「唐山地震の死者が24万あまり」であると明らかにした。

地震が発生した7月末は、周恩来首相がすでに亡くなり、毛沢東主席も危篤状態に陥っていた。鄧小平は四人組と激しい権力闘争を繰り広げていた。党・政府の宣伝部門をコントロールしていた四人組は地震の救援・復旧活動によって現実路線の鄧小平に政治闘争の主導権を握られることを警戒して、地震に関する報道に政治闘争の内容を絶対に優先させる方針を取っていた。震災による損失などには殆ど触れずに路線闘争にしたがって、地震災害と立ち向かうという唐山人像を作り上げていた。地元の幹部が新聞記者に状況を説明する際、よく使われた文言は「地震は共産主義思想の教育である」、「我々は大批判で道を切り開き、『階級闘争終焉論』、『唯生産力論』、『物質中心論』などを批判し、救援・復旧作業を促進した」、「毛主席、解放軍のおかげ、われわれ唐山人民は全国人民の友情の溢れる食料、水、服などをいただき、生活が安定している」<sup>6)</sup>というものだった。

1977年から1985年までの間、マスコミには地震に関する報道はきわめて少なかった。1985年前後、政府系の新聞には地震に関する記事が少しずつ現れたが、1986年即ち地震10周年にあたって、唐山市政府の機関紙『唐山労働日報』に、7月から地震に関する体験談、文学作品、記念活動の記事の掲載がはじまった。いくつかの「地震体験談」のようなものが掲載された。こうした報道ブームは7月28日前後頂点に達している。つまり、地震発生10周年という節目の年で政府主催のもと大きな記念行事が行われた。報道はこの記念行事を中心に展開された。その後、地震に関する報道は次第に消えていった。そして、地震20周年の1996年7月に『唐山労働日報』は「私が見る震後20年の新唐山」というコラムを開設し、読者から原稿を募集・掲載することにした。そのなかで、ある小学校は「ママから過去の出来事を聞く」という活動を行い、小学生に自分の親から震災

の体験を聞かせ、クラスで語らせることを報道し、いくつかの小学生の語りを紹介した。さらに2001年7月、即ち地震25周年の際、「体験談」は再び登場した。これらの体験談は細部に若干の違いがあるが、語る口調、文章の構造及び趣旨は共通の特徴を持っている。以下にはいくつかの例を挙げる。

1. 「大地が動き、山が揺れ、人間は怖くて食事もできなくなった」。私は幼い時、地震があったらお祖母さんは必ずこの何時生まれたかがわからない俗語をぶつぶついうのを聞いた。1976年7月28日、大地震は唐山を廃墟にした。幸いお祖母さんは2年前にこの世を去り、この悲惨なことを逃れた。しかし、たとえお祖母さんは生きていたとしても、絶対あの俗語をいわないだろう。なぜなら、歴史はすでにあの古い時代ではなく、お祖母さんの「天命を信ず、鬼神を畏敬する」思想は社会の進歩によって「共産党を信ずる」ことに代わったのだから。……夜のとぼりが降りて、転居の喜びにひたっている唐山人民はときどき殉難の家族を思い出し、悲しい寝言を言うけれども、もっと多いのは新生活への憧れと共産党への称賛であろう」（『唐山労働日報』1986年7月9日）
2. 董瀚蓮の母は解放軍に廃墟から掘り出されて助かった。救出作業した際、ある兵士の指の爪も落ちた。夜雨が降り出し、解放軍は怪我した母を兵隊のテントに運んだ。母はいつも瀚蓮に「解放軍の御恩を絶対忘れないで」といい続けている。（同上、1996年7月1日）
3. 1976年唐山大地震の時に私は11歳で、父母とも地震でなくなり、残酷な震災は心に深い傷を残した。廃墟を前にして、一時未来に対して絶望的になった。しかし、党・政府は迅速に解放軍、医療救援隊を派遣し、全国から大量の救援物質が送られ、唐山はいち早く生産活動と日常生活を回復することができた。これを見て、私の幼い心の中は、党、政府への感謝の気持ちがいっぱい、共産党の偉大さを深く感じている。（同上、2001年7月28日）

これらの体験談が政府系のメディアで掲載されたことは、政府が事件に

対する記録及び記憶する仕方を見せていると考えられる。上述の体験談の作者、書く時間などすべて異なっているが、文章の書き方や内容など共通の規則を守っているように見える。つまり、震災の被害、救出されことを特定の政党、社会制度と結びつけ、震災をめぐって語ることによって「共産党」、「解放軍」、「社会主義」の偉大さを証明することである。

このような語り方の形成は、やはり政府系のマスコミの影響が決定的な役割を果たしたと思われる。一部選択された体験談を通して、個人の記憶は公共記憶の一部となり、逆にこれらの公共記憶はのちの個人記憶の形成にひとつの規範を与えた。上述の1986、1996、2001年の体験談から、後者と前者との類似性をはっきり見ることができる。

## 二. 公共記憶空間の構築——唐山抗震記念碑、記念館、記念碑広場

災害事件に対して、救援・復旧活動が一段落したら、社会の関心は次第に災害及び災害による死亡への「説明」作業に移っていった。その「説明」の手法として、公共記念物の建設は常に利用される。行政を担う国家権力にとって、公共記念施設の建設は事件・死亡への「説明責任」を果たすと共に、事件をめぐる公の記憶を構築することにも繋がる。記念碑、記念館などの可視化された「物」を通して、事件への記憶が固定され、再構築される。以下は唐山大地震をめぐる記念物を紹介し、その役割や意義を分析したい。

### 1. 唐山抗震記念碑

唐山大地震後の8年目、即ち1984年に唐山市政府は唐山抗震記念碑を建造することを決め、デザインを公募した。142の応募があり、最終的に天津大学建築学部の李拱辰グループの案が選ばれた。

「唐山抗震記念碑」は市中心部の記念碑広場にあり、この広場は東西320メートル、南北170メートル、面積は5.44平方キロである。広場の東は「唐山抗震記念碑」で、西側は「唐山抗震記念館」である。この二つの主要建築は東西を一直線に結ぶ位置に建てられ、記念碑と記念館の間に大型の池を設け、赤のレンガで造られた通路で両建築を繋いでいる。

記念碑は主碑と副碑によって構成され、主碑の碑座高さは3メートル、碑身の高さは30メートル、4本独立した梯形鉄筋コンクリートの柱で構

成され、主碑の上の造型は4本の柱である。記念碑の解説によれば、この4本の柱は人が必ず自然災害に勝つことを象徴する。碑身の周りには高1.5メートルのところには8つの花岡岩レリーフが彫刻されている。このレリーフの内容は主に地震災害がもたらした被害の様子及び救助活動の場面である。碑体の高さ8.5メートルのところには、ひとつの幅3.86メートル、高さ1.6メートルのステンレス横額があり、その上に元中共中央総書記胡耀邦が揮毫した「唐山抗震記念碑」という7つの文字が彫られている。副碑は主碑の北の33.5メートルのところであり、碑の幅は9.5メートル、高さは2.96メートルで、花岡岩で廃墟のような形で立てられ、地震を象徴する。碑長4.3メートル、高1.6メートル、正面は青花岡石で、その上に碑文が刻された。裏面は碑文の英訳が書かれた。主碑と副碑は一つの大きな台座の上に立てられ、その台座の四つの方向に階段があり、それぞれ4段に分けられ、各段は7階あり、合わせて28階となる。これは地震が発生した日「7・28」に因んでいる。

設計者はつぎのように自分の設計意匠を説明している。

「主碑は単独の構造によって組み合わせ、部品と部品の間隙間を作り、地震による割れ目を想像させる。記念碑は二重台座で……第一階の台座の上に震災によって破壊された建築を表現した副碑で、「その上の階は聳える主碑で、4つの碑体は地面と曲線で繋がり、地面から自然に上がり、新唐山は廃墟から新生したところ」、「頂部は手の造型で、人間は必ず自然災害に勝つことを宣言する」<sup>7)</sup>

上述の説明によると、設計者の狙いは二つある。一つは地震による被害を再現すること、もう一つは人間の復旧する力である。実際には、設計者の意匠はどの程度に見る人に理解されるかわからない。筆者の実際観察した感想から言えば、主碑の巨大な碑体は観客に「圧倒的な力」の存在を感じさせる。これと比べ、「破壊」、「悲しみ」、「追悼」などはそれほど明確ではない。碑体の8つのレリーフもほぼ救援・復旧の内容である。これは

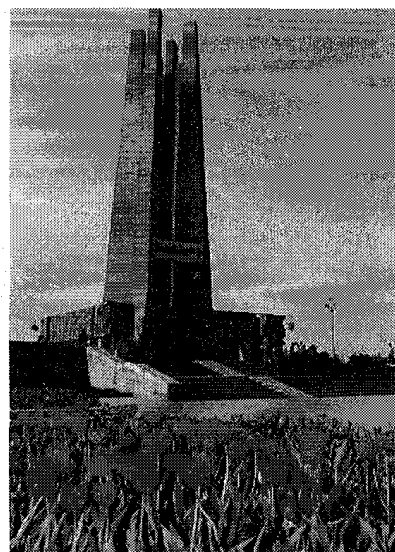


図1 唐山抗震記念碑

(<http://xici.net/b618804/d40523289.htm>による)



図2 抗震記念碑のレリーフ  
(筆者撮影)

すべてこの記念碑の名前「抗震記念碑」と合致している。

もっとも直接にこの記念空間の意味を表現するものはいうまでもなく記念碑の碑文である。この唐山抗震記念碑碑文は全部で866字あり、唐山市政府は全市民に募集して、数多くの応募の中から数回にわたって推敲を繰り返し、最終的に政府関係部門が討論して決定した<sup>8)</sup>。やや長い<sup>9)</sup>が、全文を引用する<sup>9)</sup>：

### 唐山抗震記念碑碑文

唐山乃冀東一工業重鎮，不幸于一九七六年七月二十八日凌晨三時四十二分發生強烈地震。震中東經一百一十八度十一分，北緯三十九度三十八分，震級七點八級，震中烈度十一度，震源深度十一公里。是時，人正酣睡，萬籟俱寂。突然，地光閃射，地聲轟鳴，房倒屋塌，地裂山崩，數秒之內，百年城市建設夷為虛土，二十四萬城鄉居民歿于瓦礫，十六萬多人頓成傷殘，七千多家庭斷門絕煙。此難使京津披創，全國震驚，蓋有史以來為害最烈者。

然唐山不失為華夏之靈土，民眾無愧于幽燕之英杰，雖遭此滅頂之災，終未渝回天之志。主震方止，余震頻仍，幸存者即奮掙扎之力，移傷殘之軀，匍匐互救，以沫相濡，譜成一章風雨同舟、生死與共、先人后己、公而忘私之共產主義壯曲悲歌。

地震之后，黨中央、國務院急電全國火速救援。十余萬解放軍星夜馳奔，首抵市區，舍死忘生，排險救人，清墟建房，功高蓋世。五萬名醫護人員及干部民工運送物資，解民倒懸，救死扶傷，恩重如山。四面八方捐物贈款，數十萬噸物資運達災區，唐山人民安然度過缺糧斷水之絕境。與此同時，中央慰問團親臨視察，省市黨政領導現場指揮，諸如外轉傷員、清屍防疫、通水供電、發放救濟等迅即展開，步步奏捷。震后十天，鐵路通車；未及一月，學校相繼開學，工廠先后復產，商店次第開業；冬前，百余萬間簡易住房起于廢墟，所有災民無一凍餒；災后，



疾病減少，瘟疫未萌，堪稱救災史上之奇跡。

自一九七九年，唐山重建全面展開。國家撥款五十多億元，集設計施工隊伍達十餘萬人，中央領導也多次親臨指導。經七年奮戰，市區建成一千二百萬平方米居民住宅，六百萬平方米廠房及公用設施。震后新城，高樓林立，通衢如織，翠蔭夾道，春光融融。廣大農村也瓦舍清新，五谷豐登，山海辟利，百業俱興。今日唐山，如劫后再生之鳳凰，奮翅于冀東之沃野。

撫今追昔，倏忽十年。此間一磚一石一草一木都宣示著如斯真理：中國共產黨英明偉大，社會主義制度無比優越，人民解放軍忠貞可靠，自主命運之人民不可折服。爰立此碑，以告慰震亡親人，旌表獻身英烈，鼓舞當代人民，教育后世子孫。特制此文，鑄以永志。

唐山市人民政府

一九八六年七月二十八日

〈訳文〉

唐山は冀東の産業重鎮で、不幸に一九七六年七月二十八日早朝三時四十二分強烈な地震が発生し、震中は東経一百一十八度十一分、北緯三十九度三十八分、マグニチュードは七・八、震度は十一度、震源の深さは十一キロメートル。当時人々は熟睡しており、突然、地光が閃き、地鳴りが轟くこと数秒間、百年の城市は廢墟となり、二十四万の市民が亡くなり、十六万人は重傷となり、七千あまりの家は全員死亡。被害は隣の北京、天津にも及び、全国を驚かせた。それは有史以来被害がもっとも大きいものである。

しかし、唐山人民は災害を恐れず、勇敢に災害に立ち向かって、お互いに助け合い、廢墟から立ち上がった。

地震後、党、国務院はただちに全国に、迅速に救援するよう命令を出し、十万あまりの解放軍兵士は迅速に災害地域に到着し、救助活動を展開した。五万名の医療関係者及び幹部・労働者が救援物資の運送に当たる。全国から支援物資数十万トンを送られ、唐山人民が無事に断水、断食の危機を乗り越えた。それと同時に、中央政府の慰労隊が災害地域に赴き、省・市の党・政府の責任者は現場で救援活動を指揮し、負傷者の転移、死体の埋葬、伝染病の予防、水・電力の供給、救済用品の配分など迅速に展開した。震後わずか十日で道路は開通し、

一月未満で学校、工場、商店などが次第に復旧され、冬の前に百万あまりの臨時住宅が完成、すべての被災者が入居できた。これは救済史の奇跡ともいえよう。

一九七九年以来、唐山の復旧建設は全面的に展開され、国から五十億元あまりの資金を投入し、十万を超える建設者が集まり、中央政府の指導者も数回自ら現場に赴き、仕事の指導に努める。七年間の懸命な建設作業で、市内に千二百万平方メートルの住宅、六百万平方メートルの工場及び公共施設が完成した。震後の新しい唐山はビルが林立し、産業が進み、商業が繁栄し、素晴らしい発展を遂げた。

過去の十年を顧み、すべての事実は以下の真理を明らかにした。中国共産党は英明かつ偉大な政党であり、社会主義は最も優越性を持つ制度であり、人民解放軍は最も信頼できる軍隊である。今度、この碑を立て、被災者を慰め、献身した英霊を顕彰し、人民を励まし、後世を教育し、永遠に記憶に留める。

唐山市人民政府

一九八六年七月二十八日

この碑文は現代中国語で書かれたが、対句、四文字成語などの漢語表現も大量に使われ、形式上は厳粛な印象を与える。その内容はまず地震について紹介し、そして唐山人民の自救、政府及び全国の支援によって、唐山はいち早く再建されたと語る。最後に文は次の結論に落ち着いた。「中国共産党は英明かつ偉大な政党であり、社会主義は最も優越性を持つ制度であり、人民解放軍は最も信頼できる軍隊である。」その後、この碑を立てる目的は「被災者を慰め、献身した英霊を顕彰し、人民を励まし、後世子孫を教育する」となる。さらにこの「慰め」「顕彰」「励まし」「教育」の具体的内容は「抗震記念館」に紹介されている。

## 2. 唐山抗震記念館

唐山抗震記念館は抗震記念碑広場の西側に位置している。1986年に完成した際、「唐山地震史料陳列館」といい、建築面積は1488平方メートルあった。1996年に地震20周年を記念するため、政府はこの館を増改築し、「唐山抗震記念館」と改名した。新館は建築面積5380平方メートルとなった。

館内の展示は「今日唐山・唐山市建設成就展覧」といい、全部で9つの区分に分かれて、そのなかの第2部分は直接に地震と関連する。一部の実物と写真を展示しており、例えば、地震の時刻に止まったまま壊れた時計、崩壊の建築の写真など。地震による被害の紹介以外には、生存者救助、復旧作業の状況も紹介されている。そのほかの部分たとえば第1部には唐山の歴史沿革、地理資源など及び地震後の建設状況を紹介します。第3部から第9部までは地震後唐山各産業部門の復旧・発展の成果を紹介する<sup>10)</sup>。

注意すべきことは、この記念空間の中においては、地震による被害は主に死傷者の人数、物質損失の金額等で紹介する。またこの地震を名称とした記念館にはわずか1/9の部分が地震と関係があるのみである。館内の展示の大部分は唐山の歴史・地理・物産などである。それと同時に重点的に震後唐山の復旧成果を紹介する。これは「抗震」という館名に合致しているかもしれない。しかし、この地震による重大な人命の死傷及び悲しみは、この記念空間においては十分反映されたと言ひ難い。つまり、24万人の死、16万人重傷及びこれによる被災家庭、親族及び社会にもたらした創傷よりも、政府、党、および唐山人民の建設成果がもっと重要視された。

地震被災者の体験および救助された経緯について、記念館は一冊の記念館のパンフレットで紹介している。この河北省愛国主義教育基地資料編纂委員会が編纂する『唐山抗震記念館』という本はいくつかの事例を挙げた<sup>11)</sup>。

1. 豊南南孫荘郷馬新荘村党支部書記孫維強と子供は地震の時倒れた家の下敷きとなり、彼は脱出した後、自分の子供よりもまず村の医者を手助けに行った。医者は救助されたが、彼の子供は埋められたまま亡くなった。彼は言う「私の子供一人を救助するより、医者を手助けしたら大勢の人が助けられる。」彼の行動は村の人々を感動させた。<sup>12)</sup>
2. 北京軍区のある副団長は数箇所の病気を患っていたが、部隊を率いて数百キロの急行進で地震当日の午後唐山に到着した。彼の家は唐山にあり、家を通りかかるとき、彼は妻が亡くなり、母と二人の子供は重傷を負ったことを知った。部隊の臨時対策本部は彼の家の付

近だから、同僚たちは家族のことをちょっと面倒を見てあげたらと勧めたが、彼は「私は皆を助けに来たので、家族を助けに来たのではない！」と言った。<sup>13)</sup>

3. ある70歳の農民が湖北省に運ばれ治療を受けた。年齢を聞かれたとき、彼は涙を流しながら「1歳だ、毛主席、共産党から私は二度目の生命を与えていただいた。もし昔だったら、私はたとえ地震から逃れても、飢え死か病死しかない。社会主義はわたしを救った。わたしはこれからあらためて1歳から年齢を数える。」ある12歳の負傷者は、家族が何人だと聞かれ、彼は「8億」と躊躇なく答えた。<sup>14)</sup>

このように、記念碑の碑文と合わせ、これらの体験談も救助・復旧についての政治要素を前面に打ち出している。つまり特定の政党と社会制度の役割を強調している。上述の証言内容と9つの展示の構成からみても、唐山抗震記念館の中心内容は主に震後復旧および唐山の各領域の建設成果の展示だといえよう。これは抗震記念碑とともに「抗震」を中心とする公共記念空間となる。

### 3. 唐山抗震記念碑広場

1986年に唐山抗震記念碑広場が記念碑、記念館と同時に完成した。2003年に広場はさらに拡大され、次第に唐山の中央広場となった。ここではさまざまな活動を行っている。

記念碑と記念館は具体的に事件の記録と評価を行ったが、抗震記念碑広場は記念碑と記念館の存在とは独立した空間を提供し、その「抗震記念」の空間と世俗の空間とを区別させる機能がある。一方、広場は市の中心に位置しているから、地震記念以外の行事が行われた。ここでは、新聞報道に従って、広場で行われた行事を取り上げ、その機能を分析する。

1. 7月28日は唐山大地震29周年の記念日で、早朝3時頃、大勢の市民は自発的に抗震記念碑広場に赴き、震災で亡くなった親族を追悼する。

早朝3時42分、市民の一隊が花輪を持って唐山人民の抗震精神

## 唐山大地震における追悼と記念

のシンボルである抗震記念碑の前に来て、震災で死亡した親族に哀悼の意を表す。刑福成はその中の一人である。彼は震災で孤児となり、当時15歳だった。市民の焦さん夫婦も地震の生存者で、この地震は夫婦両家合わせて14名の親族の命を奪った。毎年7月28日にこの広場で追悼を行うことは彼らにとって欠かせないことである。

これについて、焦さんは次のように語った「ここは震災を記念する場所で、亡くなった親族に会いたいときに必ずここに来る。」

追悼する人々の中、我々は29年前の地震のとき、最初に地震の情報を中央政府に伝えた開滦の労働者李玉林氏に会った。すでに60歳を超えた李玉林さんの言葉「毎年7月28日になると、亡くなった親族のことを思い出します。これは忘れられないことです。現在人々の幸せな生活ぶりを見て、安心しています。」(河北テレビ局『今日資訊』付麗茹報道による 2005年7月)

2. 唐山市は抗震記念碑広場で「土地に関する科学知識の普及及び関連法制度の理解を深める全国的『土地の日』広報活動」を行った。

6月25日にわが市は抗震記念碑広場において「土地に関する科学知識の普及及び関連法制度の理解を深める全国的『土地の日』広報活動」を行った。市党委員会副書記の楊永山、市政府副市長于山、市人民代表大会、市政协協商會議などの政府要人、市土地局、市科学技術協会、土地学会、鉱業学会、路南区、路北区、高新技术化開發区国土資源分局及び路南第二実験小学校、唐山科技幹部進修学院などの機関の幹部と関係者600人余が今回の宣伝活動に参加した。(ネットニュース2005年6月29日)

3. 雨が昨日からしとしとと降っている。雨は町全体に幾分の厳肅な雰囲気をもたらした。夕方に抗震記念碑広場を通りかかると、広場の人は平日よりかなり少なくなっていた。一人の子供はよろよろとハトを追いかけている。数人のもっと大きい子供たちが楽しそうに大声で記念碑の台座の周りで遊びまわっている。附近の大人たちは穏やかにこうした風景を見守っている。この広場は他の城市の中心広場と同じ、人々の休憩・娯楽・散歩する場所である。時間の経つ

につれ、元々この広場が背負っている「記念」する役割は少しずつ弱くなっている。昼にこの生き生きしている都市はすでにあの十数年前の震災と無縁となりつつあり、人々の心の中で、「7.28」はだんだん遠くなっている。(『北京晩報』2001年7月28日)

以上のような広場で行われた活動を1. 記念・哀悼、2. 行政の宣伝活動、3. 市民の娯楽・休憩と3分類することが出来る。そしてこの広場はすでに多機能的な都市空間となったことがわかる。勿論、ここには中心的存在である記念碑と記念館は、如何なる目的でここに来る人にも自然に地震の記憶を「喚起」し、この空間の「非日常性」を意識させることに機能しているが、一方、さまざまな日常的・世俗的な活動は絶えず地震記憶を洗い流している。こうした繰り返された「記憶の喚起」と「過去の忘却」との間に「唐山大地震」という災害の記憶はたえず再構築されつつある。

### 三. 追悼と記念行事

復旧・復興事業が進むにつれ、政府が地震関連の記念活動を行うことになる。しかし、こうした活動の大半は、模範人物の表彰及び地震関連の知識の普及で、追悼と記念ではない。以下は、地震から10年間政府が主催した主な関連活動である。

- 1976年9月1日 唐山、豊南抗震救済模範機関と模範人物代表会議を北京で開く。
- 1976年12月17日 唐山市抗震救済模範機関と人物代表大会を開く。
- 1979年3月31日 日本日立、新日本通商株式会社代表および地震で亡くなった3名の日本技術者の家族一行13人が唐山陡河発電工場を訪問した。そこで桜の樹の栽植式を行った。発電工場の前に日中友好之桜碑を立て、死者のため記念会と祭奠を行う。
- 1982年7月 中国地震学会が全国第一回地震科学青少年合宿を行う。
- 1983年9月 全国第二屆青少年地質合宿が唐山で行われる。
- 1986年7月11日 唐山抗震10周年を記念する美術・撮影展覧を行う。

その中に唯一の死者を追悼する活動は、地震で亡くなった日本籍の技術者に関わるものである。単独でその3名の死者のために追悼式を行い、また記念碑を立てるのは、おそらく死者が「日本人」という身分で日本の葬送風俗に配慮するためである。大多数の被災した唐山の人々にとって、正式な記念活動は地震後9年の1985年となった。

1985年7月28日に唐山市政府は大規模な公祭大会を主催した。この公祭大会は地震後初めての「公」的な追悼式である。唐山市の主要たる党・政府の幹部が揃って出席した。また7月28日を正式に「唐山抗震記念日」と指定した。今回の追悼式は唐山大地震の被災者のための最初のまた唯一の大規模の公祭である。

『唐山労働日報』の報道によると、公祭大会は唐山市工人文化宮の露天劇場で行われ、公祭台の中央に大きな「奠」字を掛けている。公祭台の両側に追悼の言葉を書いた「対聯」がある。上聯は「回首丙辰震災驟降忍对故土崩頹親人離异子規啼血悲生死」、下聯「拭眸乙丑国運中興欣凭桑梓重建万姓安居壮志回天慰陰陽」である。追悼式で追悼対聯を掛けるのは中国伝統的な追悼方式の一部で、対聯の内容は死者に対する評価、追悼者の哀悼の意を表すものである。その文体は古代漢語の規範に従っている。これも1976年の文化大革命が終結後に伝統文化が復帰していることを意味する。

公祭は当時の唐山政府のトップである共産党市委員会書記が祭文を読み上げ、この祭文は上述の碑文の構造と類似している。まず地震による被害を述べ、死者への哀悼の意を表し、そして復旧復興の成果を紹介し、社会主義制度の救済においての重要性を強調する。そのなかもっとも長い部分は9年間の中国と唐山の変化を紹介するもので、そのなかには当時の政治情勢を反映する部分もある。「9年間、われわれ偉大な祖国、われわれの故郷唐山に、天地を覆す変化が起こった。国家と人民に甚大な災いをもたらす『四人組』は、地震後間もなく打倒され、10年間続いた文化大革命の大動乱はすでに終結した」。このような強い政治的意味合いを持つ文言は、伝統的な中国祭文中あまり見られないものである。そのほか、祭文の最後で、追悼と記念の意義を次のように説明した。「今日、われわれは沈痛な気持ちで地震で亡くなった不幸な人々及び救助活動において命をなげうった英雄たちを追悼し、彼らの遺志を継承し、復旧・復興活動においての公のために尽くし、甘苦を共にし、不撓不屈、勇往邁進の抗震精神を引

き続き高揚する。」

ここでは、「公のために尽くし、甘苦を共にし、不撓不屈、勇往邁進」で「唐山抗震精神」を具体化しようとする。これはそれからの政府の記念行事における代表的な宣伝フレーズとなった。

この翌年の1986年は唐山大地震10周年となり、唐山抗震記念碑、抗震記念館、抗震記念碑広場が揃って完成した。7月28日、政府が盛大な記念大会を主催した。この記念大会は一年前の公祭と比べ、規模とランクは一段高くなり、国務院副総理と河北省の党政首長が出席した。この記念大会は「わが市の救助抗震救災と復旧建設がほぼ完成する」時に行われた。その主旨は「震後10年来の建設成果を検閲し、全国人民及び人民解放軍の支援を感謝し、地震中不幸に亡くなった市民と救助活動において尊い命をささげた烈士たちを追悼する」<sup>15)</sup>である。つまり、一年前の公祭と比べ、今回の記念大会の主旨はすでに追悼ではなく、唐山はすでに「震後」の非常状態から脱出し、「正常の都市」となったことを宣言することである。こうした建設成果の宣伝を通して、「社会主義」、「共産党」の偉大さを再び確認する狙いもある。

その10年後の1996年、唐山は記念唐山抗震20周年記念大会を開催した。当時の国家最高指導者共産党総書記江沢民と李鵬首相はともに大会に出席した。江沢民は唐山のため、次の「お言葉」を書き残した。「復旧・復興活動において公のために尽くし、甘苦を共にし、不撓不屈、勇往邁進の抗震精神を引き続き高揚する、新唐山をより栄え、より素晴らしい都市に建設する」。その前の1990年に唐山は国連の人居賞を受けた、国際的な名誉を得た。従って、今回の大会は唐山にとって「お祝い」の意義はもっと強かった。民間においてはこのようなやり方に対する不満もあるが、江沢民、李鵬など最高指導者が唐山に来るのは地元にとってもっとも重要な出来事とされ、江の揮毫は正式的に「唐山抗震精神」の印となった。

2001年7月の地震25周年の際、唐山市政府は座談会を開催した。テーマは「抗震の精神を広め、繁栄かつ素晴らしい近代的な新唐山を建設する」とされた。会議参加者の中心は被災者の家族ではなく、全国紙の『人民日報』社、河北省党委員会の宣伝部門、省、市政府の幹部及び当時救援・復旧作業と関わる責任者、各方面の代表などである。会議の主旨は「歴史を顧み、未来を展望し、唐山人民に党の恩および社会主義の素晴らしさを忘れないようにし、人民解放軍の偉大な功績を追想し、幹部大衆を激励し、大いに抗



震精神を広める。より緊密的に江沢民同志を核心とする党の周囲に団結し、『3つの代表』に基づき、団結一心、進取の精神を高揚し、引き続き唐山の改革解放及び近代化を推進する」<sup>16)</sup>である。ここにおいては、哀悼及び記念の色彩は大幅に弱められると同時に、「抗震精神」に新たな時代要素が注入された。例えば「3つの代表」という江沢民時代の政治綱領のようなものである。

このように、85年の公祭から86年、96年、2001年の3回の大規模の記念活動までに、唐山大地震をめぐる「公」的言説は次第に「抗震精神」という政治的語りとなった。行事の重心は追悼・記念から顕彰・激励・宣誓へ変わりつつある。

上述の記念行事以外、1985年7月25日に中共唐山市委員会、唐山市人民政府は毎年7月28日を「唐山抗震記念日」と指定し、その決議の中、「唐山抗震記念日」の意義を次のように記している。「この日に市民及び政府機関は意義がある行事を行わなければならない。毎年、記念活動を通して、市民に社会主義の優越性を再認識させ、理想、規律を高め、抗震精神を向上させよう。また、記念活動を当年の仕事の重点目標とリンクさせ、活動によって人々が与えられた任務を遂行するように促進する。」<sup>17)</sup>

しかし、6年後の1991年11月13日に唐山市第9回人民代表大会常務委員会第25次会议において、7月28日を「唐山市減災日」と改めた。

これは国連で1989年12月22日に通過した44/236号決議、すなわち10月の第2の水曜日を「国際減災日」に指定することに応じるものと考えられる。この国連決議の趣旨は全世界に自然災害を減らす文化を提唱し、災害を防止、軽減、及び防備することである。強い政治的色彩を持つ「抗震記念日」から単純な人道意義の「減災日」へ改めることから、中国社会文化の変動を窺うことができる。

#### 四. 個人の記憶と追悼

国家権力によって行われた公共記念空間及び記念儀式には、24万の死者はひとつの集合体として追悼・記念されたのである。記念碑広場、記念碑前、記念館の中および公祭大会などの場で、追悼者には「不幸」の共有を通して、ある連帯意識が生まれ、家族を失った「喪失感」、孤独感がある程度緩和され、心の傷を癒されることは、公共記念空間の構築と公祭を

行う意義だと考えられる。しかし、ひとりひとりの人間にとって、彼らは決して24万分の1という統計上の数字ではなく、親であり、子供であり、兄弟であり、友人であり、それぞれが自分の愛、日常生活、未来への夢があり、したがって、彼らの死およびその追悼・記念は、一つの公の記念行事、あるいは「抗震精神」ですべて片付けることができない。つまり、それぞれ個性的であり、自分しかない追悼・記念が必要である。

上述のように、震災後の遺体処理において、大半の死者が身分の弁別したうで普段通り埋葬することが出来ないからお墓などの決まった場所で追悼することが不可能となった。そのため、唐山では、7月28日に交差点で「焼紙」という独特の風俗が生まれた。ある人は次のように唐山での見聞を紹介する。

(7月28日) 朝家から出ると、すべての交差点の周囲は紙の灰燼だらけで、唐山の住民は我々に、あれは前夜に彼の世の親族のため「紙銭」を燃やしたものであると教えてくれた。親族の遺骨がどこに埋められたかがまったくわからないから、当時遺体を運ぶ軍用車の行き先を判断して、毎年これの通った交差点で紙銭を燃やし、哀悼する。(ネットのメッセージ)

そもそも「焼紙」という形式は中国においてごく普通の追悼する風俗である。彼の世に行っても、お金がかかるという発想から、黄色の紙で擬製のお金を作り、燃やして彼の世の親族へ送るということである。普段は、死者の命日、清明節及びお墓参りのときに行われる。また、中国の華北地方に「送寒衣」の習俗もある。『唐山市誌』によると、唐山地域では、陰暦10月1日は墓参りの日である。その季節はすでに寒い冬になり、人々は冬着を着るとき、なくなった親族も冬着を着る必要があると思い、その日に死後3年以上の親族の墓で紙銭を燃やし、これは「送寒衣」(冬着を送る)といい、また死者への追悼の意も含まれている。1949年共産党政権の樹立以後、この風俗は次第に消えてしまった。しかし、この日に住宅街や交差点の付近で「焼紙」して死んだ親族を哀悼する人もいる。

事実上は現在の唐山では、当時の町並みが殆ど分からなくなった。大多数の人にとって、遺体を運ぶ車の行き先を弁別するのは殆ど不可能である。重要なのは、交差点での「焼紙」という行為の存在は、公の記念は完全に

は個人の追悼活動に取って代わることはできないことを意味するということである。多くの生存者にとって、伝統的な風俗「焼紙」は依然として彼らが死者とかわすコミュニケーションの唯一の方法である。

しかし、お墓、お寺などのような非日常の空間で行うべき追悼は、交差点のような世俗空間である場合には、世俗の生活と儀礼的な行為との衝突が生じる。煙・火等による火事の危険性、灰燼による空気汚染などがしばしば行政によって問題視される。もっと重要なのは、追悼する者にとっては自分が所有する安定的な「追悼空間」が必要であることである。これは個人の力で実現できなければ、国家、地域社会の力で実現するしかない。上述のように、中国において国家が構築した記念空間は公の追悼の機能しかない。また社会主義中国では日本にあるような地域社会は極端に弱体化され、十分機能しないのが現状である。したがって、唐山大震災の死者の追悼・記念に商業資本が登場する、という現象が生じた。

2001年、唐山のある民営企業が「南湖科普記念園」を建設することを発表した。この記念園は地震知識を普及する施設以外、目玉とされているのは、「地震記念壁」である。計画では、記念壁は9つの壁によって構成され、ひとつの壁は2700の氏名を刻むことができ、唐山大地震の死者の遺族は申し込めば、死者の名前を刻むことができる。しかし、一定の費用を支払わなければならない。壁の表には名前ひとつ人民元1000元、裏面には800元である。内容は死者の名前、誕生日、死亡時間と追悼する言葉を刻むことができる。

当初この記念壁の建設は政府の支持を得たようである。唐山の共産党機関紙『唐山労働日報』は次のような記事を掲載した。「地震記念壁前の文明祭奠」。この記事の中には、数人の応募した者の感想が紹介された。

「お父さんのため、この日に交差点で紙銭を燃やすことしかできない。今度やっと安定した場所を見つけた。長年の願いがようやく実現した」、「地震の時、お祖母さんの遺体は見つからなかった。ここでお祖母さんの名前を見て、やさしい面影を思い出す、このような形式は非常に良い、文明的で、『焼紙』より遥かによい。」<sup>18)</sup>

この会社のホールに、感謝の意を表する錦の旗、手紙などが掛けられている。例えば、「感親人灵帰有地、謝華盈千秋功德」（錦の旗）

「今年の7月28日は母の命日で、家族全員が南湖地震記念壁前に亡母

の霊を追悼しにきた。例年と違っているのは悲しみ以外に感激や慰められる気持ちがある。」(感謝の手紙)



図3 会社の応接室に展示されている  
記念壁の建設を讃える錦の旗  
(筆者撮影)

こうした感謝の言葉の中、もっとも多いのはこの記念壁が遺族に一つの「固定する場所」を提供したことに感謝することである。ここで、追悼者の大半は花や花輪を捧げる形で追悼を行う。人々は涙を流しながら壁の名前に触れたり、死者の名前に向って何かを訴えたりしている。この壁の建設は確かに一部の遺族の需要を満足させ、国家権力による公共記念空間と個人追悼の間の空白

を埋める役割を果たしている。

しかし、すべての遺族がその方式に賛成するわけではない。費用を徴収することに対して不満がある者が少なくない。報道によると、「一部の唐山市民は、『7・28』大地震は唐山人の心に永遠に残る傷口であり、公益性がある事業であれば、24万の死者が平等で追悼を受けるべきだ。このようにお金次第のやり方、どうも納得できない」、「多くの遺族はこの壁のことを口にする、憤りを隠せない。『コストって、記念壁の表と裏とでは、名前を刻むことに200元の差があるの?!』彼らから見れば、災害及び災害の被災者を目当てにして金儲けすること、また金額の差でランク付けることは唐山人の心に大きな傷を与えることである。これはまさに彼らが親族を失った心の傷口に塩を塗る行為である。」<sup>19)</sup>

このように、記念壁に反対する者の最大の理由はこの壁が「公益性」を持つ以上、費用を徴収してはいけない、ということである。唐山市地震史料研究会副会長の葛昌秋が言うには、「ある意味で、『7・28』大地震はこの都市の一回性の文化資源で、『抗震精神』は24万唐山人の生命を代価にして形成したものである。ここで、24万死者のための記念物は政府が責任を持って作るべきだ。市場に任せるべきではない。」<sup>20)</sup>

大規模災害を利用して経済的利益を得ようとする行為はあらゆる文化においても、簡単には許されないだろう。この会社はこうした社会的抵抗を

予想していないわけではない。会社側は、徴収する費用は単なる「材料費・人件費」で、一度払うだけで、あとの維持費用はすべて会社負担となるので、800-1000元の徴収額は決して高くないし、会社がここで利益を得ようとする気は毛頭もない、と説明しながら、この記念園の中の目立つ位置に記念碑を建造した。その上には当時の国家指導者江沢民の「抗震精神」をめぐる揮毫を刻んだ。記



図4 地震記念壁

(筆者撮影)

念園の総体的紹介の中、とりわけ地震知識の普及、地震史料の保存などの目的を強調し、これらを前提とした商業活動は、唐山の「貴重な地震文化資源」の開発であり、「唐山の知名度を向上させる」にも繋がる、と説明した。

われわれはこうした行為を国家権力への妥協としてみることができ、また商業資本がこれを通して国家権力を利用しようとすることも理解できる。記念園という空間に国家権力の象徴するものを入れて、政府と社会大衆の受け入れを求め、公益と商業利益とが両立することを実現しようとする。これは改革開放後の中国におけるあらたな社会現象である。これは日本の阪神大震災の追悼・記念空間的構築と比較したら、相違が明らかである。このプロジェクトはいまなお建設中で、最終の結果と社会的反応がどうなるかは、さらなる観察が必要である。

## おわりに

上述の分析によって、われわれは唐山大地震の死者の記念と追悼をめぐって、国家権力が公共記念空間の構築、公祭と記念行事の開催及び一部の個人体験談の「徴用」によって、この大規模災害の記録と記憶を固定化することを見た。その特徴は災害による被害及び苦痛の記録と記憶を弱め、救済・復旧復興の成果を強調することである。これを通して、特定の政党及び社会制度の「優越性」が証明される。このような「処理」の方法は一定の効果があるが、個性的な追悼の必要性があるので、民間は依然として

「焼紙」のような伝統的な追悼方式を守っている。そのほか、1949年以来、共産党政権は民間組織に対してこれを弱体化させ取り締る政策を取り、特に都市において、すべての人がある「単位」(所属する会社や政府機関など)に所属することになった。この「単位」は仕事の間であり、医療、出産、住宅、教育、葬式までのサービスの提供者でもある。伝統的な地縁と血縁に基づいて成り立つ地域社会は破壊され、人々の横のつながりは縦の社会関係となった。それによってもともと民間葬送習俗を伝承する主体が社会的な基盤を失った。唐山においては、日本の阪神大地震の後のように、多くの民間組織が記念行事を行うことは、見あたらない。こうした民間組織の欠如は商業資本の進出に機会を与えた。民間会社が料金を徴収して地震記念壁を建造する、ということは現代中国の市場化による資本が公益の領域へ進出している現象として理解できる。ここで生じた対立は地域社会・民間組織の役割は商業資本が替代できないことを物語っている。追悼習俗は国家権力と商業資本の二重影響によって変化している。現在の唐山では、7・28に交差点で「焼紙」することと記念広場、記念壁前に花、花輪を捧げること、二つのやり方が同時に存在している。

今年が唐山大地震30周年である。唐山市政府は盛大な記念行事を行ったが、基本的な形式は前と同じである。ただ、ひとつの変化の兆しは、地元の新聞は「私の1976」をテーマにして民間の個人体験を募集し、インターネット上にも大量の体験談が登場したことである。これらの体験談は過去政府系の新聞に掲載されたものとは若干違っていることを、わずかの例から見ることができる。紙面の制約でここでは深い分析は後に譲るが、ずっと埋められた民間の大量の記録と記憶が掘り起されることによって、われわれはもっと正確的にこの大地震及び中国社会・文化を理解することができるかと確信している。

## 注

- 1) 陳永弟編著『回憶唐山大地震』山西人民出版社 2001年9月、224頁
- 2) 前掲書、224頁
- 3) 唐山市地方志編纂委員会編『唐山市誌』方志出版社 1999年11月、439頁
- 4) 錢鋼『唐山大地震』当代中国出版社 2005年5月、23頁
- 5) 前掲書、23頁
- 6) 前掲書、146頁

唐山大地震における追悼と記念

- 7) 「思想的凝結 精神的象征——唐山抗震記念碑記念碑広場設計随筆」『建築学報』1987年12期
- 8) 劉俊増「誰是唐山抗震記念碑碑文的作者？」人民網地方聯報（ネット版）2001年7月25日
- 9) 一部文学的な表現を節訳とした。
- 10) 2006年唐山大地震30周年の記念行事の一環として、同記念館の展示はさらに充実した、という報道がある。筆者が7月29日に見学しに行くとき、あいにく閉館となったが、報道によると、増設した部分の大半は近年新唐山の建設成果に関する内容という。
- 11) 河北省愛国主義教育基地資料叢書編委会編『唐山抗震記念館』河北人民出版社1998年11月
- 12) 前掲書、19頁
- 13) 前掲書、23頁
- 14) 前掲書、36頁
- 15) 『唐山労働日報』1986年7月29日 第1版
- 16) 前掲資料、2001年7月28日 第1版
- 17) 前掲資料、1985年7月28日 第1版
- 18) 「地震記念壁前の文明祭奠」『唐山労働日報』2004年7月29日 3版
- 19) 『燕趙晩報』2004年4月21日
- 20) 前掲資料